

実践記録の部

社会事象を関係的・総合的にとらえさせる指導

—— リレーション・マップ作成を通して ——

足利市立毛野中学校

高 橋 知 俊

1 はじめに

社会科学習は生徒に社会認識をもたせ深めさせることが目的である。

社会認識とは「社会における諸々の問題や事物・事象に対しての見方・考え方であり、それを働かせて、社会のもつ意味をとらえさせること」と考えている。社会科学習の中で生徒はどのように社会認識を深めていくか。日々の授業から考えてみると、いくつかの段階があげられる。まず、社会事物・事象そのものの事実をつかむ・知ることである。地理的・歴史的事実・政治的・経済的事実等を知る段階である。次に、それらの社会事物・事象の事実を関係的・総合的につかむ・とらえる段階である。A事象とB事象はどのようなかかわりがあるか、AとBを含む事象全体はどうかなどを思考・把握することである。そして3つ目はいろいろな事実関係をとらえ、しかも総合的に社会事象をつかみ、それらがどのような社会的価値をもっているかを思考・判断する段階である。自ら社会的価値を見つけ、社会に存在する意味をつかむ段階である。

以上のような段階により生徒の社会に対する認識は深まっていくものと考える。

だが、生徒に社会認識を深めさせていく上で、現在感じている問題点がいくつかある。その中から以下、2点あげてみる。

(1) 理解が断片的・部分的であること

社会的事物・事象に対する見方・考え方方が狭く浅い生徒が少なくないことを日々の授業で感じる。A事象B事象それぞれの事実は理解できるが、AとBとのかかわり合い、AB事象全体の把握等になると理解が浅い。断片的・部分的な理解なのである。社会事象を関係的にとらえ、総合的につかんでこそ、社会に存在する多様な意味をつかむことができるわけである。日々の授業の中で考えていかなければならないであろう。

(2) 思考することを好まないこと

思考することを好まない生徒が多いのを感じる。上の学年になればなるほどその傾向が強い。いろいろな原因があげられようが、ここでは指導者側の反省として、(1)生徒を受身にしていること。(2)日々の授業が知識理解中心となりがちであること。つまり思考力育成の軽視をあげざるを得ない。生徒が受身であるところに思考力は育たないという考え方である。生徒が自ら考える学習をめざしていくことが(1)とも関連して大きな課題であるのではないだろうか。

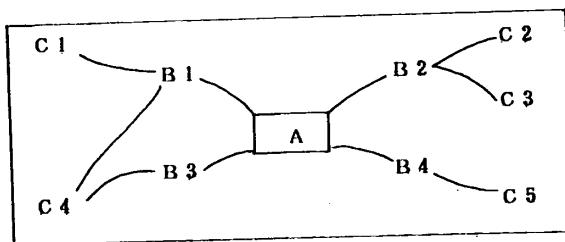
以上のようなことを考え、本稿では、生徒自らが社会事象を関係的にとらえ、より広く深く

社会事象を見る力を育てるために「リレーション・マップ」を取り上げ、以下述べてみることにする。

2 リレーション・マップ (relation-map) について

リレーションは関係、マップは地図、つまりリレーション・マップを関係地図と称する。

次の図をもとに説明する。



中心的社会事象Aに関係がある事象B群(上図のB 1～B 4)をAの周囲に線で結ぶ。そのB群のそれぞれにかかわりのある事象C群をB群から線で結ぶ。更にそのあと周囲にかかわりある事象を広げていく。線は一本で広がっていくだけでなく、たとえば、B 1とC 4がかかわりをもっていれば、それら同志も結ぶことになる。これがリレーション・マップである。

(1) リレーション・マップ作成上の指導内容

リレーション・マップを作成させるにあたって生徒に次のことを指導した。

- イ. テーマ(中心的社会事象)をスタート(用紙のほぼ中央に位置)として、これに関係ある事柄をまわりに線で結び、さらにそのあとも関係のある事柄を結び広げていく。
- ロ. 線は線引きできちんと書かなくてよい。フリー手帳でよいから、関係している事柄を次から次へと結び広げていくこと。
- ハ. 原則として事柄は語句を中心にはじめ広げていくこと。その語句の説明ができたら書く。
(要点のみを書く)
- ニ. 事柄に関係していることをイラストや絵であらわしてもよい。
- ホ. 事柄の中で、自分なりに感じたこと、考えたことがあったら、その事柄の近くに書く。
- ヘ. 全体としてのまとめの感想があったら、用紙のあいているところに自由に書く。
- ト. 以上の書き方は、特に規制しないので、自分で工夫して自由に書いてよい。ただし、関係ある事柄はよく考えてまとめること。

(2) リレーション・マップ作成上の留意点

リレーション・マップを生徒に作成させる上で留意することをいくつかあげてみる。

- イ. まとめるために活用させる資料は、教科書資料・ノート・資料集、その他自由とする。
- ロ. 作成のための時間(指導計画)は学習のまとめの段階の時間とする。学習量(小単元の時間数)あるいはテーマにより、1・2時間程度がよいであろう。

- ハ. 中心的社会事象（テーマ）は個人で考えさせてもよい。全体に広がりが可能なものにした方が生徒にとってはやりやすいようである。
- ニ. 使用する用紙は白上質紙B4あるいはその半裁、またはノートとする。伸び伸びと書かせるためにはB4の用紙がよいようである。
- ホ. 語句を結んでいくリレーション・マップが基本型であるが、前述したようにあまり規制せず、自由にまとめさせたのがよい。特にイラストは生徒の興味を引き、また多色のサインペン等を使用させるのも効果がある。
- ヘ. 学期に1、2度程度しか作成できないので、日常の授業の中でリレーション・マップ的なまとめ方を使用し、慣れさせておくとよい。たとえば、指導者の板書や生徒自身の調べ学習のまとめ方等で使用すると効果が出てくる。
- ト. 机間巡回をして個別指導をするよい機会である。特に社会科を苦手と思っている生徒や社会科嫌いの生徒にはあたたかな個別指導が必要である。
- チ. リレーション・マップ作品そのものがきれいにまとまっていることのみに目をうばわれず、社会事象と社会事象の関係はどうかをよく考えているところを評価したい。従って、生徒の指導も、当然、ここが中心となることを常に留意しておく。

3 リレーション・マップの作品類型

生徒の多くの作品をその表現の仕方から4種類の型に分けることができる。次にその4種類の型それぞれの作品を1、2例あげてみる。なお作品は約2分の1程度に縮小してある。

(1) 語句型（作品1・2）

リレーション・マップの基本型である。社会事象（語句）を中心に線で結んでいくものである。半数程度の生徒はこの型のリレーション・マップを作成している。

(2) 説明型（作品3・4）

事象そのものを語句で結んでいくが、その主なものについて（あるいはすべてに）簡単にあるいは詳しく説明しているものである。自分の表現で要点をまとめさせたいものである。

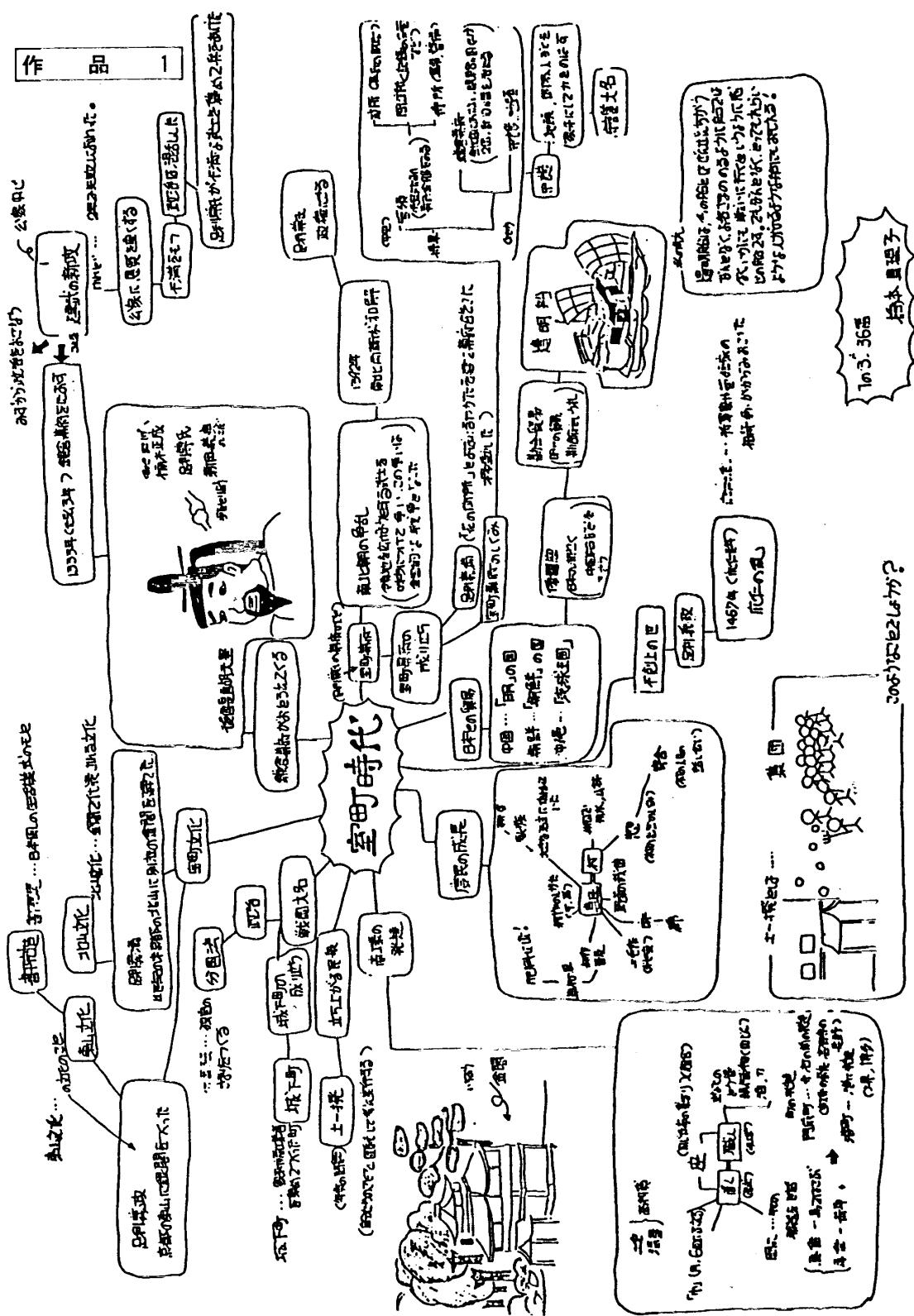
(3) イラスト型（作品5・6）

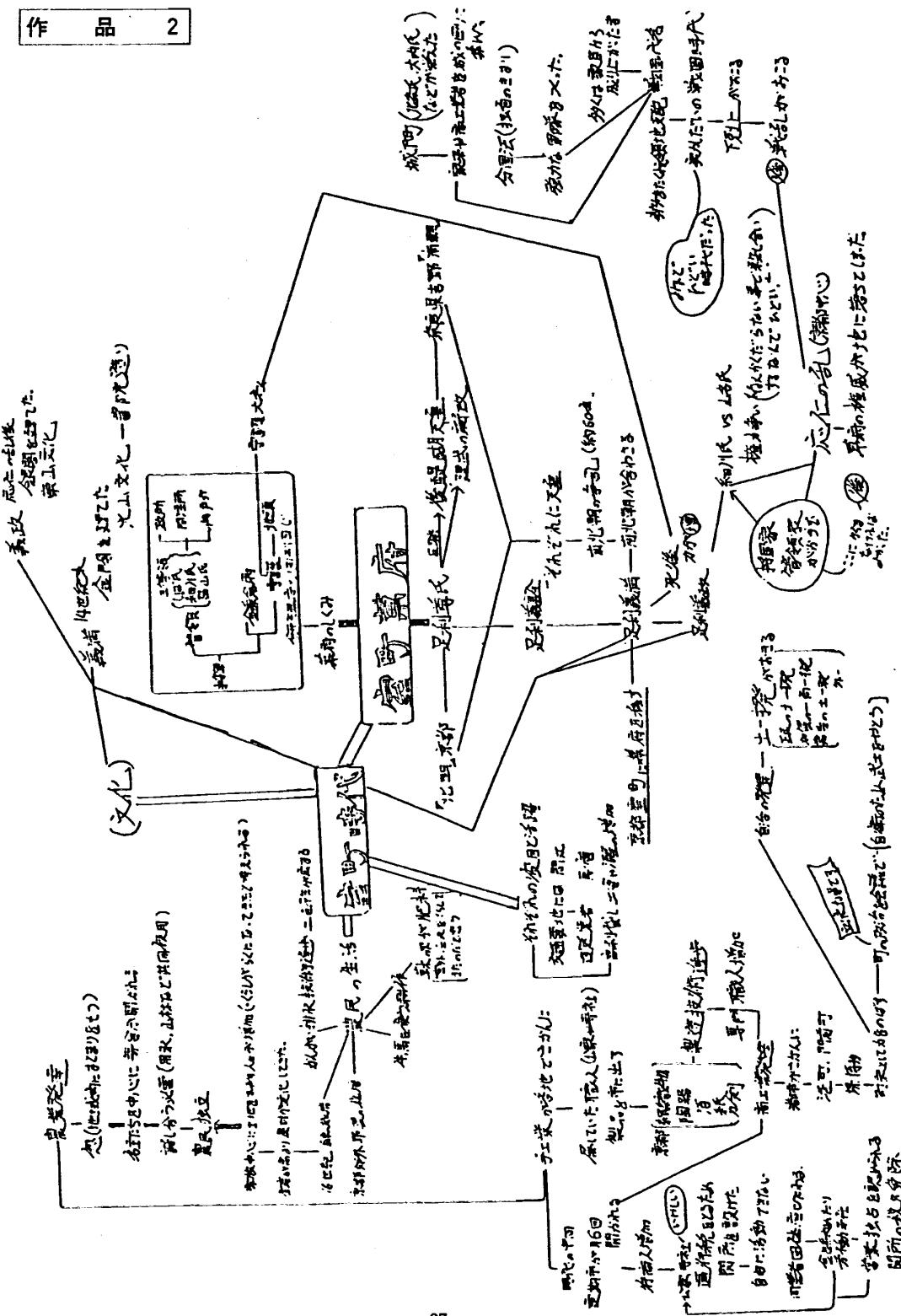
全般的にイラストを中心にして事象のかかわりを表しているものである。内容をよく考えてイラストに表すのでむずかしさがあるが、中学生にとっては興味をひくのか、語句型、説明型にもイラストを書いている生徒が多い。

(4) 感想型（作品7）

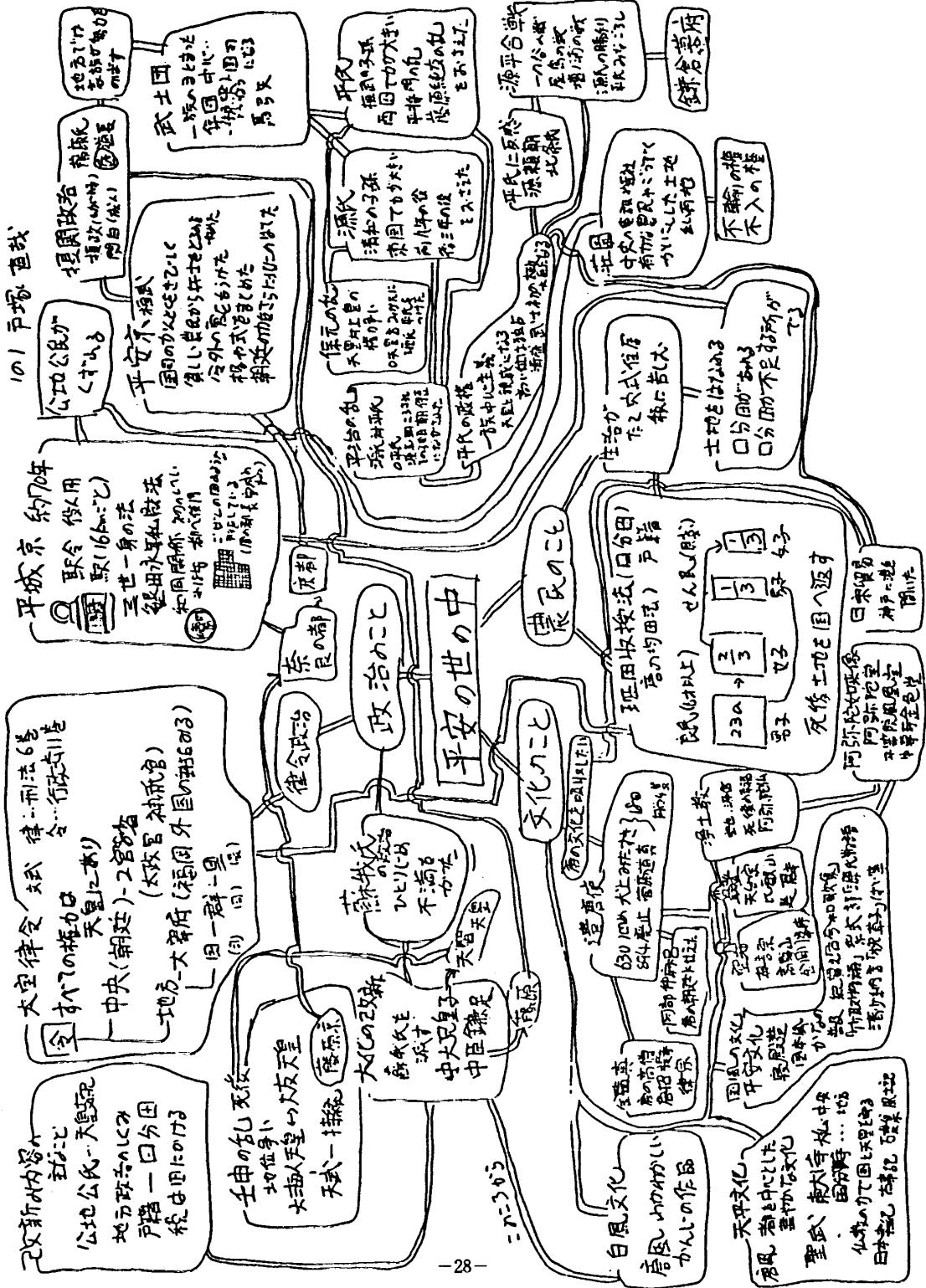
社会事象1つ1つに自分の考え（感想）を書きまとめたものである。この型の生徒は多くはないが、事象そのものをよく考えている。

基本型は指導するが、まとめ方にあまり規制をせず、自由に書かせてみると、生徒はそれぞれ工夫し個性豊かなまとめ方をするものである。しかし、要は、社会事象を関係的にとらえ、その結果として社会事象を総合的につかんでくれるかどうかである。





101 戸場直哉



容山志

アーティストの自作自演で、歌詞は日本語で、曲調は日本の民謡風。

- ・草不灰の肥糞
- ・かたがい・熊太役休
- ・牛馬
- ・野柳の越前
- ・新・新御元佑

南北工業の往来
交通の要地
荷物の運送や貿易が
世話を担当する港
がここだ。
高利廻しも古じ土倉が
少くない。

橋本正次・足利泰氏・新田義
1333年に幕府執事に任命された。

後醍醐天皇
御所に不満をもつ御家人
や平所にござり、度々不^レ比^シ
リを比^シせうひした。

A small decorative element consisting of a vertical rectangle with a textured pattern and several thin lines radiating from its top corners.

卷之三

新代半原保之助の死後、中心にいたのは川比山名氏の重行に
向ける權力争いが、ついでに半原家をめぐる
領主の問題争い、それが
かたれ1467年(応永4年)にはおしまが
がんに、このおしまは東洋をも
中心に11年を続いた。

「アーティストの歌は、必ずしもアーティストの歌だとは限らない。アーティストが歌う歌の中には、歌詞そのものがアーティストの歌ではない歌がある。」

戦国で名をなしていい平野、
都に近い山の上に城を築き、
その他の城を守るために
元老院工部省と並んで
城門町をつくった。

軍事、政治、社会などにいたでござる。前に解説でも述べて多くの五五七〇の意見がござりますが、要するに、日本は、國内の大企業を統制して、國外へ出稼して、國外の資源を供給して、國内の大企業へ還流する形で、大企業化してござる。

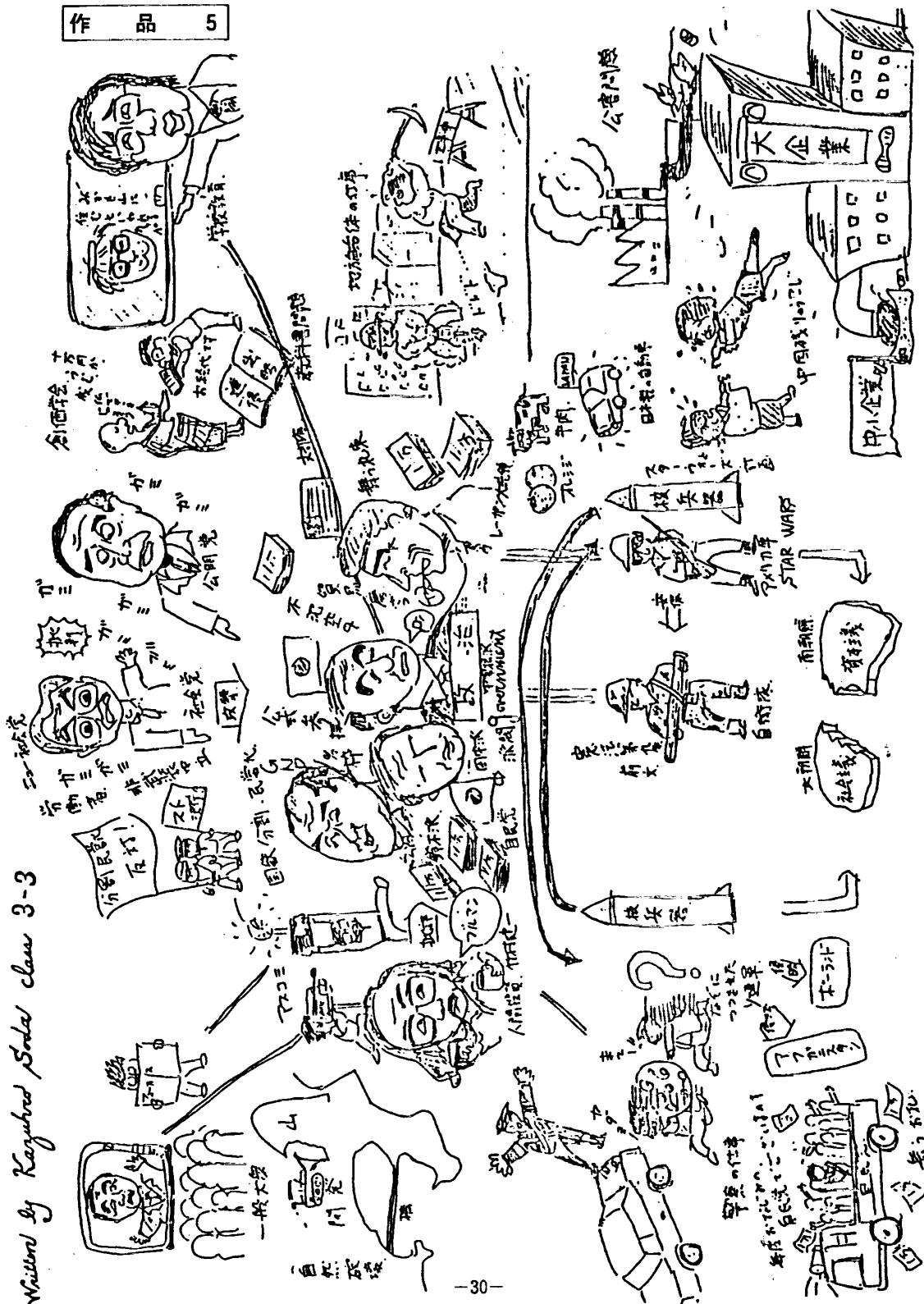
要: 滅ほる事に
花の性質といふ
はなづかにて
にして事実をも
にがむ。・
て是れはの事
何もまこと事に
いふ。事の事
エーベルト 240
サムライ時代
じい

```

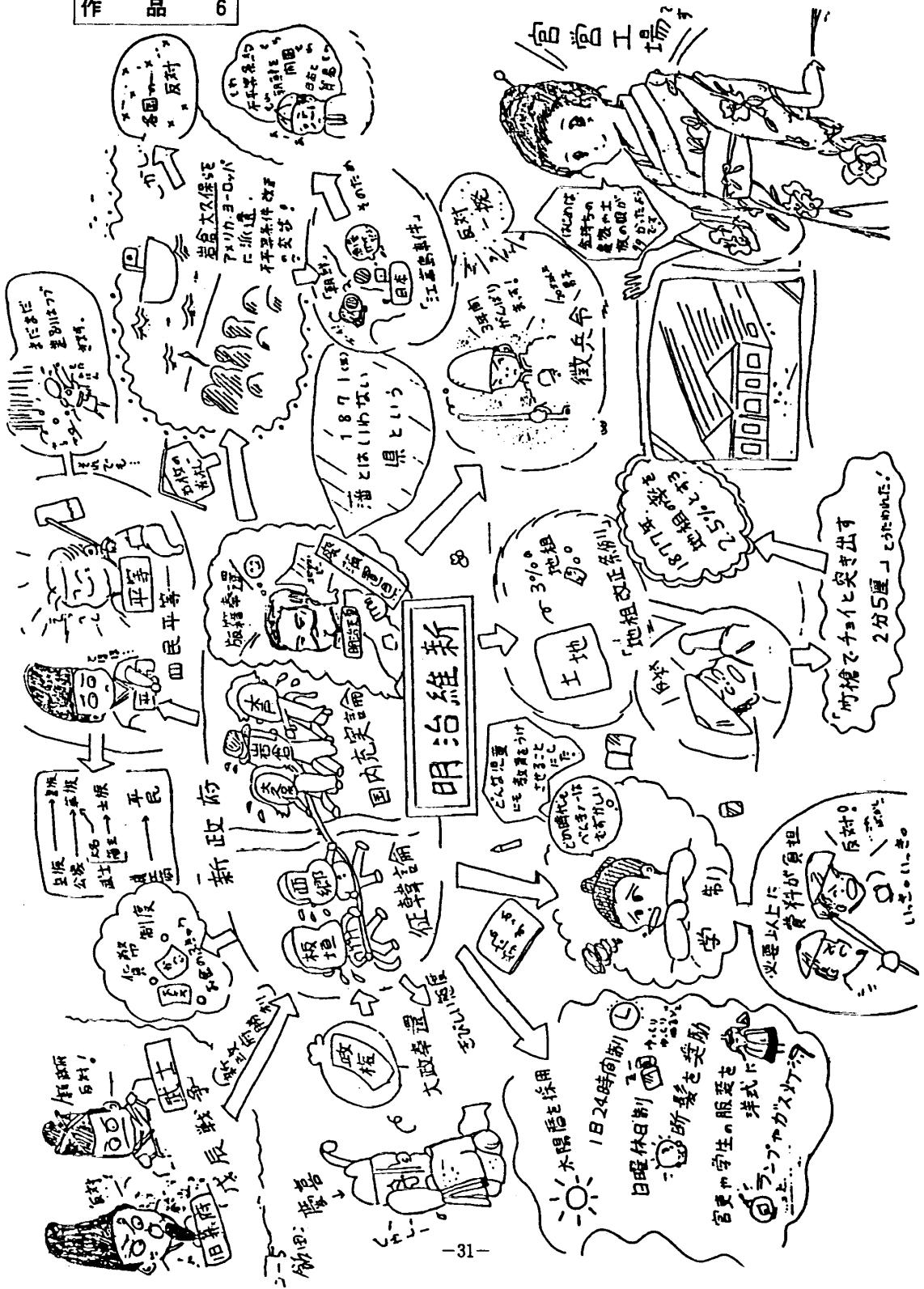
graph TD
    A[治政] --- B[政治]
    A --- C[政治家]
    A --- D[政治思想]
    A --- E[政治学]
    B --- F[政治思想]
    B --- G[政治学]
    C --- H[政治思想]
    C --- I[政治学]
    D --- J[政治思想]
    D --- K[政治学]
    E --- L[政治思想]
    E --- M[政治学]
  
```

Written by Raghubir Singh class 3-3

作品 5

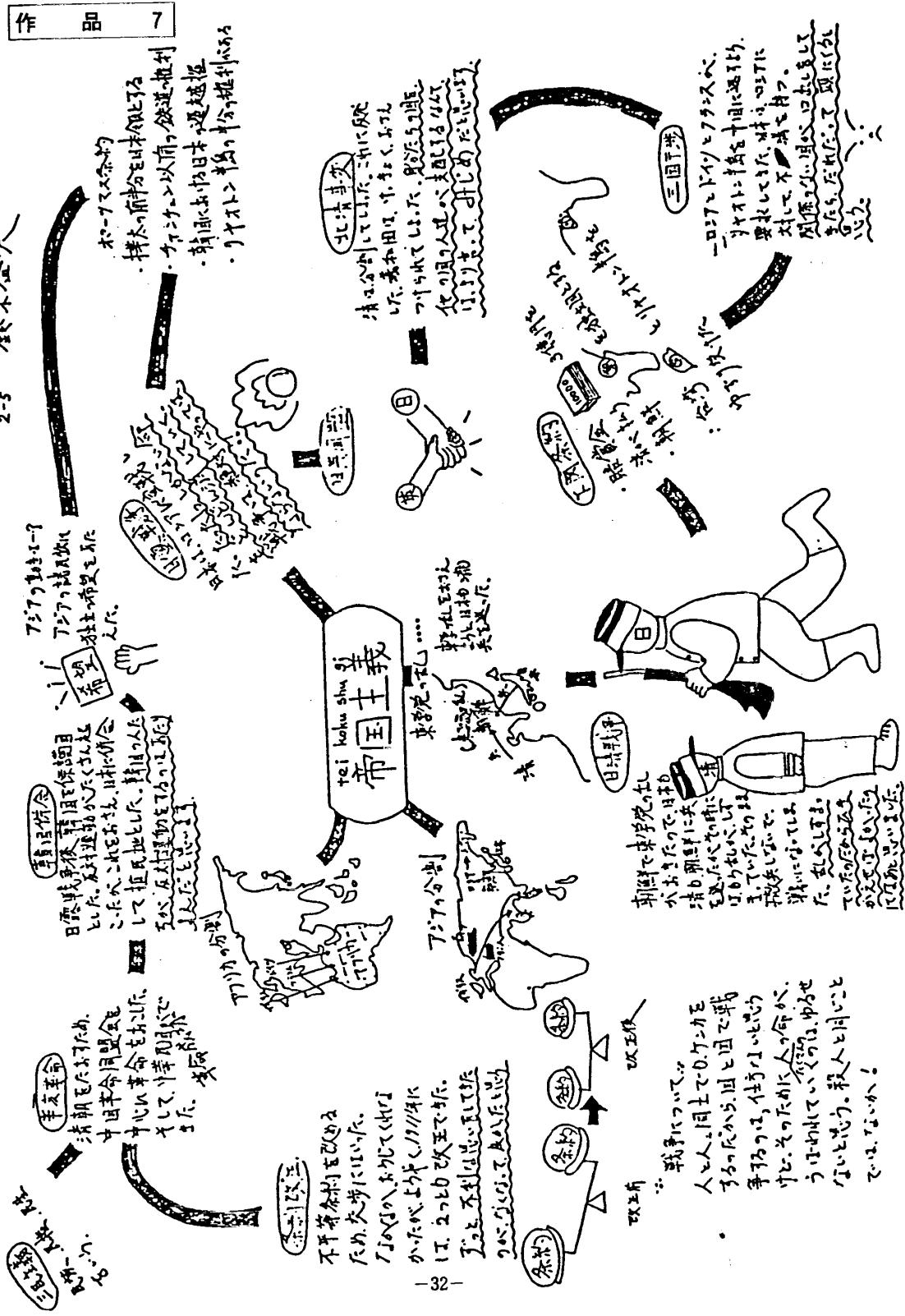


作品 6



2-5 金木益火

2



4 リレーション・マップの利点

今年度の1, 2学期に担当学級9学級に3, 4度、リレーション・マップを作成させてみた。そこから、指導者として学び得たこのマップの利点をいくつかあげてみる。

- (1) リレーション・マップ作成を通して、事象を関係的にとらえる力を育成することが期待できる。生徒は今まで学習したことを改めて関係的な見方で社会事象を見つめ直すわけである。そして、一つの社会事象が他のものと密接なかかわりをもっていることを認識していくことができる。
- (2) リレーション・マップ作成の過程は前述したように関係的なものの見方・考え方の過程である。その結果として、社会事象は他の多くの事象とかかわりをもって存在していることをつかみ、事象を総合的に見ることができる。つまり、リレーション・マップは社会事象を総合的に把握させるのに有効な方法である。
- (3) 学習活動に興味・関心をもたせることは大切である。リレーション・マップはどの生徒にもすぐでき、イラスト等興味のある表現方法も取り入れられ、生徒にとっては楽しいものである。従って、このマップは生徒の学習意欲を引き出し、高めていくのに効果があろう。
- (4) 学習のまとめ（小単元単位以上のまとめ）の方法はいろいろ考えられる。テスト形式のプリントによるまとめ、新聞づくりによるものなどを実施してきたが、今まで学習したこと简单にまとめるだけに終わり、よく深化発展するまでにはいかなかった。リレーション・マップによるまとめの方法は、生徒により差異はあるものの、社会事象を更に見つめ考える学習になり有効なものではないだろうか。
- (5) 中学校は教科担当制である。現在、9学級を担当しているが、1学級週2時間程度では生徒がよく見えない。だが、マップ作成のような作業学習によって、生徒の特性がいろいろと見えてきて、以後の指導に役立つものである。リレーション・マップに限らないが作業学習をおおいに取り入れるべきであろう。

5 プザンの頭脳地図

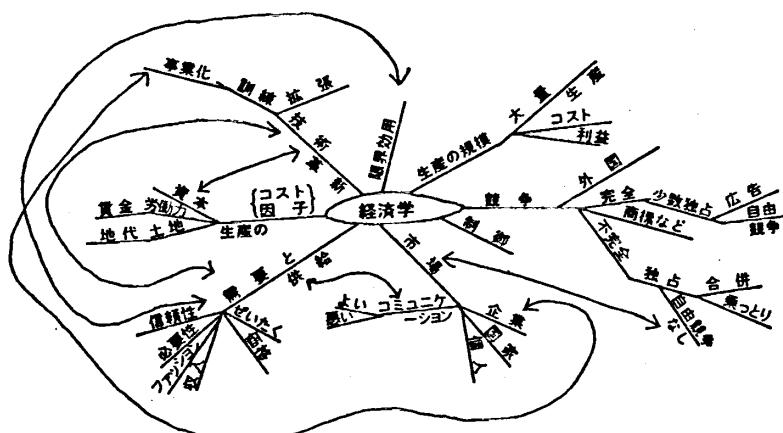
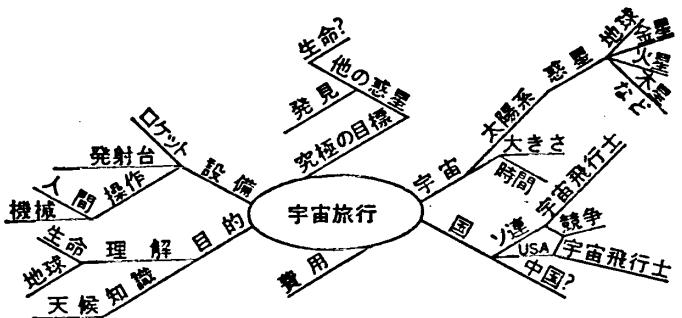
リレーション・マップについてある程度はあるが実践研究しているところに、同僚からブザン著、佐藤 哲訳の「頭のよくなる本」という書物を紹介された。この本の中にリレーション・マップとよく似ている頭脳地図というものがのっている。あまりにも似ているので大変驚いている次第であるが、ここにブザンの頭脳地図を簡単に紹介したい。

(1) トニー・ブザン

ブリティッシュ・コロムビア大学を卒業し、ロンドン大学で教鞭をとり、現在、ラーニング・メソッドグループを主宰し、大学や企業向けに各種の講演、セミナーなどをおこなっている。

(2) 頭脳地図とは

ブザンは「ノートのとり方——記憶と創造的思考のための頭脳地図」という項の中で次のことを主張している。『脳が情報をもっとも効率がよいように結びつけるとしたら、情報は、



できるだけ容易に適切な結びつきに「はまりこむ」ような構造をとるべきだ。さらに脳がキー概念を相互に結びつけ統合するようにはたらくなら、私たちのノートも、これにふさわしい構造をとらねばならない。伝統的な「直線的」なノートは、これにふさわしくない。ノートの一番上からはじめて、文章や項目のリストを読み下していくやり方はやめて、主題となる概念を中心として、そこから外にむかって、個々の概念へと枝わかれしていくやり方をとるべき

だ。』ブザンの主張しているその「主題となる概念を中心としてそこから外にむかって、個々の概念へと枝わかれ」ということの例を次にあげてみる。これが頭脳地図である。

(3) 頭脳地図の利点

上記のような頭脳地図は直線的なノートにくらべて、数々の利点をもっているとして、ブザンは次のようなことをあげている。

- イ. 主題である概念がより明確に定義される。
- ロ. それぞれの概念の相対的な重要さが、はっきりと示されている。重要な概念ほど中心の近くに、重要でない概念ほど外側に配慮される。
- ハ. キー概念相互のつながりが、その距離と、あいだを結ぶ線によって一目でわかる。
- ニ. これらの結果、記憶も復習もより効率が高まり時間がかかる。
- ホ. 新しい知識をつけ加えるのがかんたんだ。消したり行間にわりこませたりする必要がない。
- ヘ. それぞれの地図のちがいが一目でわかる。このことは記憶に役立つ。
- ト. エッセーの草稿のような創造的な仕事のためのノートとしてもすぐれている。地図にはおわりがないから、脳が新しい概念のつながりを作るのがはるかに容易だ。

(4) 頭脳地図作成の注意点

- イ. 楷書で書くこと。のちに読み返すときに、楷書のノートの方がより視覚に訴え、より直線的で、より理解しやすい。そのために少しあけいに時間がかかるだろうが、これは読み返すときにとり返すことができる。
- ロ. ことばは線の上に書くこと。線は他の線と結びついていること。これが頭脳や図の構造の基本となる。
- ハ. 一本の線の上に一語だけを書くこと。ことばを特定のことばといっしょにしないことで、ことばを結びつけるかぎり多く残しておくことができる。これによって、より自由で柔軟なノート作りができる。
- ニ. このようなノート作りは創造的な作業だから、頭脳は、できるかぎり「自由」である必要がある。ことばをどこにいれようとか、どのことばをいれるべきかなどと思いつらうこととは、単に時間をよけいに食うだけだ。主題について思いついたことをすべて書き出すのが、このノートのねらいなのだ。頭脳は書くよりも早く概念を送り出してくるから、休むひまなどあるはずがない。さっさとペンをおろして書き進めばよい。順序とか構成を心配する必要はない。

以上、ブザンの頭脳地図について、その主なことを、ブザン著「頭のよくなる本」から引用して紹介してみたが、リレーション・マップを作成する上で大変参考になることが多い。詳細についてはこの書物を参照していただきたい。(参考、東京図書、ブザン著「頭がよくなる本」佐藤 哲訳)

6 おわりに

日々の社会科の授業の中で悩むことが多く、解決しなければならない問題点は多々ある。今回、生徒に「社会事象というものは、ただ単独で存在するのではなく、複雑多岐に他の事象とかかわりをもっており、そのかかわりをじっくりと考え、そして社会事象を全般的にとらえさせたい。」という考え方から、リレーション・マップ作成を通して、しっかりした理論がないまま実践してきた。どちらかというと、実践しながら生徒から学ばされ、わかってきた部分が多いようである。

課題をあげ、実践研究し成果をあげることは大変むずかしいことである。やはり継続と改善が大切と考える。今後、ブザンの頭脳地図をおおいに参考にしながら、生徒の特性をよくつかみながら、リレーション・マップを改善していきたいと考えている。

また、リレーション・マップは年間の生徒の学習の一部であって、やはり、日々の社会科授業全般をよく見据えて、生徒にとっての社会科学習はどうあるべきかを考え、実践していくかなければならないとも思っている。

評

生徒の社会認識は、生徒一人ひとりの内に深化・拡充させるものであり、学級集団の中で体験的に充足されてはじめて成立するものであります。このリレーション・マップづくりの学習は、生徒の社会認識を深めるうえで、今後の社会科学習においてますます研究されるべき学習方法の一つであります。

リレーション・マップづくりは、学習の基礎的基本的内容に枝葉をつけながら、社会事象に対するイメージをより鮮明化するのに効果的であります。また、この作業を通して自らの思考体制を構築することに役立つものであります。さらには、このマップが、視覚に訴えられる具象性のある図によって提示されることで、生徒の学習状況を評価し、補充指導を可能にします。このような観点から、この実践的研究は、社会科學習のあり方に大きな示唆を教えてくれました。

今後とも、実践的に研究され學習成果を上げられるよう期待いたします。